





羣書類從卷第三百九十九



檢校保已一集

合戰部狀

太平記

伊豫守の道子俊

今川

愚うむうむはとのまゝゆせあもすあくぬ底金一た  
えへれへれわきかくへりゆせよあくゆせ  
あくまうるはあくゆせあうて骨のうをひあく物  
うもあくゆせあくゆせあくゆせのれ親祖へりあく  
ものいきうむうむをかくやうとあくゆせあくゆせ  
まかくゆせあくゆせあくゆせのまへ

はやくあきるをりとおつら左衛の首物詔  
そりのひゆふかへて作をきてまへ今も  
つぶ首をとて思と思ふ我みども源を  
勇又うたむぬひどもへゆくは山名修理  
大ま時氏信氏とす明徳後松み田所はいからくれ  
隣園大も父かうけ常母ノ秋子源はうひ  
朝敵シテ敵シテ其謂シテ我達武治東富浦  
代は御シテ御シテ主法以徳ハナミ氏  
百怪ハナミよしと野の山名とよふすりも仰  
六活せのうシテのう内行シテ又軍は難儀

とも思ひありまされば序代の御詔の事とも  
あきれぬまも魚シテ目シテ井シテあにとへやシテ  
すれどもおもふおもひへともの年シテ思ふ  
もくかのすもうせシテ序シテ御シテ親シテの忍シテ  
をもくとれとのととかやシテある事にの成  
り死に雅意シテある故シテ御不審シテ  
ひりきなりとる息シテも聞シテよめ案シテ御敵  
小限シテは昔シテやうの大もシテとよく心シテ  
るもや實シテ一文シテ不通シテあり志シテのう  
やうする事シテハづかの敵シテ常に

下日其世はさうもぐるな事の不存剝毛と  
つよひとも思ひて今もひあ定れ。二三  
とよりあるほどつ事あ。秋方をもやきぬれ  
がすもももとづめりするわくもあもれられ。もなう  
もん跡に定ふ思ひかえどやもあは父乃證法の  
まねうと書付侍るあり是のひ寔え多  
アシヘよと三か里へそりたゞおやえ支流  
分明の車斗をアアリ

一神代ルハ唯二人ゐるありけめども其子孫アムモ  
モキタクミキタク其末ノ々或國王大臣或民百姓等

あねそうい節くぞれゐる事無ひ人ハ田と作人不  
死之あとどくらむ氏あよ若く歟某きりく。梨  
事ハヨウ父乃也ハアリテ某和躬き二三代の祖乃  
事か。としあやもと称。後日我子孫ハ必定  
一氏を祀。既とれ仰。者にあひぬ下へられ。今アラホ  
圓え。アリ片。アリ半。キナリ通

八萬卷。ヒハ義家朝臣陸奥守鎌守府將軍の御  
子義園。ヒハ義家朝臣陸奥守鎌守府將軍の御  
子義園。ヒハ義家朝臣陸奥守鎌守府將軍の御  
子義園。ヒハ義家朝臣陸奥守鎌守府將軍の御

子義園。ヒハ義家朝臣陸奥守鎌守府將軍の御

道筋より主はるゝ大御所錦小治原ハ主とぞを  
タゞ也頼氏ハ平石屋お三郎もあつてせりひきの  
漸嵩家が以擔せりひき尾張の人で濃川をとへ  
ありのうの者庶民もあり半細川島山す。は  
義包が所下より玉川す。又梓義包公行へ  
あまゆき見く力人ふ勝きのり。也誠に高祖は  
と多云義康被襟のよなり養き、志是もくづく  
人止かく。ひしれの後ふかく。又梓義包大行ふ  
ハ篠文迎付ひ。ハ猶無不煩りく。至物程小有事  
ゆひく。主代を無事にてひ。ハ祇ふ源ふ翁ひ

主は主と國をてあをは。美事奉おげ。唐子ト主  
信もととア侍ありさん。又義家殿が脚立。云  
我七代の孫に吾生がりて天下代え。ト主信せ  
ほれ。家時乃御代小當。不猶も時不來事と  
ちやうめ。一きれはや八幡大菩薩よ。アノひて  
我命とほえ。三代の中より天下とぞ。アヌ  
ふる納はふえ。也。海。アノ御所乃御前より  
御馬の秋ホカ。の御是ヤ。アノ也。天下とぞ。す  
唯は。主。アリ。主。と雨。御。御。佐。ノ。也。如。一。代。

あくは御志よりてお主の威りありと秋木

正哉

先祖ハ富井御の臣を祖すは名前あれのア 宝篋

院底よりて系圖かと云小づれありとあま

御意たまひに身を落ふるは物終矣也ゆゑ

天下をうどむの後ハ日本その誰くは門若け

下あくぬくもへき一族をあくに殊更ヒハ謙下て可敷

事也かふりく者とぞつゝと思ふあくひ又

道とまへて御代の助とあく其徳よりて

ア立身ヒ朝々綿小汚役作をきび事ハ名直義武勝急

直義  
直冬

恩寺殿官内太輔ヒアシ島山大藏が、神西家一

官内が神直氏秋ホカクハ御今まへ事人をすく  
集乃ひ一也

一 我ホ先祖事ヒ義氏ヒ御子ヨ長氏ヒ總父ヒ吉良  
ヒサヤ也其子ヒ満内ホナシヨ玉田ヒタニヒ内川ヒ  
也貞義ヒ總大道源名首領ヒ朝木ヒ祖父ヒ基氏  
ヒ六從父兄弟也吉良兩義右衛門ヒ故處の所為ヨヒヒヒ  
キホウ也川城ハ基氏斗相續ナリテ國ヒハ母方小  
笠原ホウトモ方ヒヒツノ御ア也ノ野善利ハ三庫

大も和のくそ母方もとく一方ゆづるもはくの跡とア  
セモ川の川もくかくまくばくの事也墓氏の店  
いもくよああああ  
ミタニ  
ひきよふたとモ川の石川をもろ思耶ともも是も  
其臺氏が御食す處ハ數度の御為よ連枝也仍達武  
は須御跡小アアキヒテ一派と國より伊勢方の國も  
ちも不れ領也其臺氏の妹禪こうや國名ひり也  
三位もと云々父、法師主也一之が神を御入道の丈  
のふ跡もくまくまくまくまくまくまくまくまく  
父もくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
父もくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

余川名と左馬道の脚暁より長氏のり年乃御時  
裝束東料了まりと吉良庄惣領可為進退とが邊  
小故小基氏不啻有ありとひや故度の代省記  
上總へ道合孤身も父子と整物より邊亂止き予僧ゆ  
つゝは門内相傳也東福寺佛向禪師ハア後禪也仍  
被塔頭正清院日記代寄追也以和尚ハ我等先祖  
今川一君げ不知行せしもめちま政所もくそ  
高木ノ道をも一者お伯父とておせしもくそ  
一又至一とて秋七世乃父母ハ菩提小林代号也  
文部省著書子源の中には名字地元に存するあ

ひぬけはるす  
もたわく  
進あらん  
左廻はるかに  
よせ  
よせ  
よせ

一大仰所の出来事成門もよき事なる坐てくわせ大仰所  
山也ゆめ一多内山也ニ元也トハ左の所也と云ひ  
内也ハ折也柄也扇也も飾也小治居は萬萬の時也  
山也二事も傳折也柄也湯桶のもも云々ありとる先  
代乃也日暮也と云ふ所は松彦也なりる當代大仰  
所ノアリトモもりや

元治甲子正月  
上洛の所不思議乃  
事あつて三月八

橋田御とおの時内前事の夕日向をもとより  
女一人系らる御子孫恩事よりを代守候て  
謹りは無度合哉アリ知後晴あ夙とありて志やアす  
タトモ多く如是生身事よりしてひど御モヤ  
ルの事事も有リア定く爲よ松兵庫道内候先  
者良よ能得つよ生在内アリは也幸運も云々お  
そくアリて存亡を了す因生まく其後人ともものに満たぬ  
事ありは事關東御立候より内に上松兵庫道は  
ア勤めアリアリ也、又船的奥氏が兩所所の仕送意と考  
察の上松立候きをされどももとよりも

雖重多々人貴とて御余念哉もしうれまもくや  
そのとねゆ傍の道の祖父あり

一六浦羅合戰は大將名越うづく  
一方の大將  
勝利をもと御軍は降参されりとお手記。書たる  
うち無意の事也ひ記乃化者ハ寛方源重の者そ  
無事内に押さ如が書たらりや寛尾龍也す  
あつむ切がるよとあるとくに筆記事めやまも  
やまあるのあゆきや昔葉持すては勝寺は惠林と  
本記と先手余卷持すのひく錦小治原の脚目  
よかまくれと玄惠法師より傳せりとあく

恩の詩の事は仰年は且の事すとあともかく不  
ちうひあたるやへ進む書の文切出と死まふるを程  
不可有年間もあほし後日中絶せ近代重く書達  
きりゆてふの事もと多くてかせどもばく高名題と  
あひきするやうに高名のくとも且勢もく斗ふる  
凡てもあ一向略事もまた無歸歌すとば御代重行てば三四  
十年以來の事たゞも無歸歌すとば御代重行てば三四  
年代の者を立すたけ記の御代重行すとおもゆゑ  
ハもすら後徳記のたゞもあくしてもうるあれもあたま  
かちひのあとあまよては死すえ九十九年也大とハ

ちうよゑもんじがむちあひの備やれやうへし  
まきく錦小治屋御前より去惠法苑讀み  
多代の事よりじぬどうに時事と人の見聞  
ふくらめび思言を ふ唯とぞく歌高イす風あひ  
一九冬日御退院の事御傳りありとすお腹と手  
記はるまの不全也 予孫の為不便の事あはせりと  
是乃は愚見がまとめてあるれあたすもとく  
めばれま事ハシテアキスミトニ号是な想記て網川御傳  
所ノシ物もとくねやうめく松曲をすまう多代乃  
人トハシメテ自九抄御上洛をとて而く歌す。

ま名まうれあくと多紀アリめよ  
一丹羽藤村八幡宮御前より御禮揚ひ 且御前  
書と引田源一とはみえもと國師は兩御前  
御とまと一定神前モニ進一に役人テアリ  
入ハ一とす駕か一人ハ山中移大輪り、或ふ山中移  
多く毎日傍人ハ得もまもや は事をとへを書ひらけ  
氣除すまもや ば山移大輪り、或ふ山中移  
今川少納川をひておおきやわらきまきて新田源一  
すとくとく書ひもとくとくおおきまとおも  
自らあらひのれうへ改めまく小道外からと見ゆ

代まゐあれ、ひきの書くへたらす、ひくのよ  
ゆれ爲面目あひゆ、細川は室主もく  
一裏は大河新川東寺れ御陣也、是日も山門小御事  
也、是方れと自宮方すよ、味方無糧難儀  
うて東六國山西御院、西老の山川  
長坂をもに連く大船とは、御院に敵を獲  
阿院院、奉み向く説方せまひ至の前そ、船のう  
て車の拂タヒ、船左のくわよと船うちりうき三  
三日をもく四万河系勢、城を向くるも重て敵を獲、而  
連く、船の村ぬれ袖とよづく向船ひに、先駆

よハ仁木右馬助義長今の方を太夫也、三井寺落めくと  
地藏山は數扇向たり、よ義長もじい、よけもつゝれ  
張あひとちく、故度勿論とす、年をき後日ある  
金銀よ仁木半退、相談す、伊勢ふりいそと矣  
力は者、仁木半退、相談す、伊勢ふりいそと矣  
子た是とおほきと、左馬の内、ひくとをたま  
ひくとも、花氏のせん、たる大船もと拂けり、  
うりこ時左馬と、立す、と太刀とあまくに  
あいて甲せん、うき、馬のひくとひくとをまく

太刀より拂ひるふ左近は笠巣ふね二の板と切く前  
ある敵をすに分金をもて賄ひ頭のをえりも後  
小左衛門が人屋村平とものと云ふあいそゝ新奇そ  
は軍お駒とものからもとれめて三をさく今川殿がい  
ある駒と持りひく段方を被ふくをめしたる  
甲ともほぬまとももりひくもら巻切額ふほに  
底とううかりやぬもとくもく取へふり退へと達  
りきそれよりは太刀八く手ふる月すひへと  
前重ねてゐるかとと經へしづ左刀も籠もも敵  
鐵列石をうてそ相傳也太刀の國吉化を

一 鎌武二年日駿河國牛越河原は戰日御方お負  
日錦小浜處は討死をへきす、成綱川は虜劔  
弓圍邊もむ五年東北仁すうち先店前日討死仕  
しと唯一騎天勢代中に號をうけられき内方に  
くり乃ち千川名四那三郎入道び時討死也左  
ノ道居下はまづは是、お死の済やもあひて退  
もうち味方とまめられ、後日れば合戦の自ら  
と車下くは馬は兵隊押送しなれ、御馬廻りのと  
同トは馬の尾とあてひをせよもくもく厭され  
左後半とまづを起してお詫疏からまもれはあ

て御跡よりより奥津の高木越前守それより至  
後九月御退の時兵庫裏御堂を立ちて三筋  
腹切の着用射角射し而して細川守房の舟舟よめり  
下りてやうりと敵入道友は是もとて腰めす所下  
て船舟やうりび車と後日も錦小治屋の席には  
物語より一び二度見る事もあせじと云ふ事  
や一定とあくわ黒鬼うらあひせあつきよ化  
武者心は固くとと思ふよばくひゑはる  
不審也と悟る一也が事あるとせんと毎隔間本末  
記すもア一度在事也着まつて御沙汰やまとてそ腰

## 備也

一式部大輔入道事御三郎中主代金紙の時角通  
大將より自京都下向遠は因あやの中山先  
代の大將名越と云者と討爾ま相模山陽布とて御后  
のそき要害と捕くまくらむか乃ゆすすとそ式  
部入道後れを過方年うそ善され多歎のま続か年に  
馳へらむへ追被くれば雖不とも小更不人馬  
の通すよ車を適らむ一若よりまくはるる風と云ふ馬  
は馬車を乗りひくり馬内尾毛もひもゆのは

三月被まくさるやまくお野川アシカニみ大水オカミあらそ  
鶴見タケミ今イマとよ下シタの渡ワタハ佐木太刀官ソクマタケミ直マサニ津ツ  
申マサニは強更タフモトこもかまカマカマと仰アヒテは河中カワミよそ  
馬ウマとゆふ村ムラとくまれてトクマレテのりひき金川カネガワ三郷ミヤウと云  
毛ウツノモリひしヒシと一イチ所ロケもう毛ウツの毛ウツ武部ムラハシの道ミササギ  
八美女ハナメいづり草ハラスめの山サンを爲スルハ大師オオミ利リの御ミササギ佐木ソクマと  
駒ウマめほまうきホマウキひ駒ウマ自リハ河底カワタよりげ外縣エクシキを高  
坐スルされうるあやめ西シとすと紀キみよおアアかすか  
子コ鶴タケあよりくアヨリクセキセキひからヒカラやばよに驕ハラスぬ鳥トリ千飼チハシ頼  
貞固ツバク多タ河カワも秀武ヒカル頼義タケミ固タケミ七ナナ郎ロウ貞ツバク也タタキ固タケミ有アリず浦ハマ

御内閣の事務も其の後も忠實にてうながせられ地刑部の輔佐範滿  
八日時武藏少将主事の系はちくられぬひ久重病か  
里と馬小走きのをともに力革に兩足と縛り伏せ  
され少しあやめと切落されぬとして酒田方脅よ云  
一家の人小頬とそぞらをうなづひ跡あるまゝには  
頬氣管骨七筋が養せられぬうとも卑世乃間  
跡絶ハシナガ也佛滿禪師ボクムツは即ち當日往ひ也達  
長寺圓學寺以前住也赤坂アカザカ範國バンク先代の時一天  
下生家タマニヤ一夕時せ三よし生家タマニヤ達ひとてかくら  
あはれ事なり也基氏御立され時より左衛門

とハタナカヒ中より一跡の相續を乞候るも亦否雲  
院落代詔のひへ也。五童名松丸を勧範用。よき  
一絆國後氏よりも。ノム。ノミ。ノミ。ノミ。ノミ。  
今園は入野木田久人との祖父也。

一、延武四年やうん慶永元年やうん大奥勢にて  
北島源大納言入道乃ち是故に御望三十万騎と  
抑くよ治セ。以れ桃井殿河もて。今播磨守。津吉  
勢方三浦久以下為陸方自跡おどり。か左入道  
彼ハ其時ハ遠江國三倉山小陣となりて。以れ方は勢方に  
泡からく浦道不くして。合致あり。自三河國之吉良君

安房守于時安房佐満義朝臣高刑部大輔三河勢云  
ト北かく二年東駿河く義濃國黒田小笠原もとにて  
當國の守護人上政淳ひが弼禰遠江守山下もとく  
出立を乞ひ承るもとす合て。トモヤセラヨ明白。八合  
一大車とて浦道勢方三千もと方て一二三番代闇を  
入船せざるゝ。トモヤセラヨ。小桃井  
宮はも勢方一ノノ。左度三浦久ニノノ。吉良  
三に勢方高刑部ハ三箇也。桃井勢方ハアたゞの鉢と  
つもあも。左度立焉。と思ふ。ノヒシ。ノア  
クモ成馬。右付。トモ。其後俄々背く。小桃井

八郎糸倉八郎左衛門とれ又三郎重蔵み郎かよ  
若者をすくすく、圍むる事あるれを當りけん人の中  
より一番勢の高け城主にててゆき大櫻桃  
井よりして赤坂にしめ牛山とお處よ池をもとと  
御方へ駆け馳よからじゆくとて一馬よよくる筆毛  
あゝ馬は乗たる武者切彦され波く内武者皆  
切彦されて驍よまろひゆ時味方とみきれ一轄  
身故金錢始まつて桃井守はま縁がとうり廻り  
赤坂宿北南とある駅けよ退たり五の道筋へ駕され  
て歎首としけよとの以下おとすよりひて西行るも

てさうほうけ武者二騎と左近羽薄いひや  
橋越えりる写くわ瀬川の堤ほと水深く乃家あま  
るふすけ井のひを東小へて西障へは歎重て  
かくぬ時黒田の味方よかりて人を下すまと  
星よく明白御方珍可侍とお仕合せ、糸倉八郎  
左衛門とく員かくまくらうとくめびれおこうゆー  
よ大將とく続けうども志アシテ大と名はれ、力  
うくばあるうて黒田よ被加東す桃井ヤクルは  
城のうちをもととてまくと御城令まである  
とくとく承認よもよもにまく一退で亦味方たて匪

てうちより敵も退也物ありひより勝利を取る事  
と多くは軍事之後尔が度元作一、松井、海かん  
故には幾度も負軍せひもく人あつゝ天命を  
左様小松室よりて遙々奉不可むせゆひ  
て力ある自力を時退、ある也と云はれしと土蔵  
の黒地、京都より切ぬまよしく支ぬ道所方  
をみ合へ、奥勢、あら野、ふねの軍の移伊勢乃  
まくちか良天王寺乃合戦のきり也京勢伊勢雲隠  
河馳合て敗る、左脚方お負へもよまむゆ承  
れ軍、土岐頼遠一人も名とす也自身の負ひ

かはるも太年記の書をもつて  
ひ附くとまことに  
也但作若不尋間又我乎不既自  
は作乎はる久人之にせす毛  
りもりてす書の

般の因数十ヶ所の本領は既に諸の國の恩  
賞を蒙り入鼎ありて  
兩稅亦年年の利よりて  
而して富國之務間多矣  
詔誥阿術也惟一と云甚  
ちとくとて盡氏ふ小有  
は赤坂の軍材紙  
帝一朝は多きとゆる  
方名主と是る

身よりぬきじふ景也と一経へる事等一内  
事本法華一時秋赤鳥をたひりて小勝事ともぬ  
ばまとのひき足湯室セテハ故後其時思合て女の  
奥ハ軍士はせりすそくして思ひうるを極て  
神乃所隸と信と元始より以來秋水の身の  
すば赤鳥と云作成したる事西の本年の  
陣にて、毎度女歸あまく被ふる者も見ゆ  
とみて必め彼の勝利をこそばく秋水の民  
奥乃瀬一小なりよ

一後國とハ有慶ノ神乎復りて事御あまーと總

列ノ志深かく事えーふうひいある事より總列設祭  
先立のひ一後亦立修一とも左中務大神入道小口  
キ一やうやう事と大神入道ぬく思ひあらう事や  
一ふりあくても角角もー時大神入道まく孫ね毛  
立一 小讓あくとせよ此後久が草乃陰すもこりよ  
事うみーくくと乃と経入道春の祀儀とて達長寺  
主立一城めーとまむくひとけよせて國とも不  
順ともやまーからでトー、を恩と更小あひもて  
は度遠の國勢ら故我お猶野の主田上園了也

こちよき氣くまの邊の國事も泰化地との一也す  
をがくあへばそんか筋肉のれ故よからぬ也  
天のものすと云ふべからず事誠るが故に驕慢  
とすすわらひりまと我乎を下て頗りゆき  
極ふるうて裏恨ふる遠國の事もア後も  
こうやま時れ事いせれ御事かれは主心作は因ひます  
してよどきあらゆもまかし申シテ乃是る  
かくやうれ親類ホの不義焉く算のひきもせび  
一氣の事も可まざる道あれ御置多もせび  
ふれよれ明よわざを治ひぬ左よやうれ不道

不義れ親類ホもぬよあひゆるやあそらくまく  
て一よ御事也前立く遠はせ事仲高へ道もて  
よどむと意も難意済事も成くの仕と意もす  
りか便乃西ゆけゆくもなるゆづる

一細川相模守即不審は附左へ道慶院方奉公忠節  
人小越ゆじつとも彼志平記小兵新篠即よ御と  
ももさすやまゆく事ハ既及御大事もりる  
写左席御よひそ小左へ道慶院のひく身せ八條氏  
小無外リ義者也これとめよせて清氏小左  
ちくをもれハ御大事もる乃へとひとともあま

うへるばかりのひより請ひして其の後は秋ホ遠方す。  
モーとみ毛勝めーとぞひーは多川の中  
まくともに清氏を抜國す海もととて重く  
毛脚下さと夏のぬそく家脚用ひればと  
ひ詠すひ一言諸道附れまることより事と左  
門達りひるをふ清氏跡ひねまこと實するを教  
アシム小越列直世改清氏内ヒリと依脚  
景海もとをもとむぬ身せ左京あらわりとも可不  
物と清氏示ひ位被よアキトテ思ひあ  
よがれむこや是は隨て左の道患ひてふてふ

多くほんた事代無為りとなり事無隠  
とかやばち年記小かうもん是ひ代者も後  
小やうりうるや其の後書小

細川小左衛門とくを名こそりめく脇へりこれ  
是が相模主に源老翁傳中守より傳て今出は  
しはめひよみづくや比身の事あれどもおれ  
時れ事かれ書のせぬもよからず  
一細川清氏事実よハ野々からまけよや事くに  
有れ思ひよくと言ひよじよ一少く或人の仕事  
事くや一よハすも成八幡よ西アセテ於社頭鷦鷯

子著く八幡八竈と号む。本一小八神、後小社みと  
御守りにてのれ天下文もよりを從社家三方へ進むる  
事とさもひ致又は源氏の御葉り判形も不審也。す  
とても左近の詔ひへり。秋の事の東寺合戦の頃は源  
氏主への同道由あるべし。一例として度合  
武者へは別てのアゲの由里やうねに難道  
乃後遠に國益ふ左近松原等其の國であつて  
ひらきやへと餘不ヤ行ひ。清氏の後を依々遠  
別よ左國セ。間ひ時ハ左京せずとき御所清氏と  
並の後は思ひて有あはう。後で御行ゆる

よしもよづく我かと意よ叶く左殿院居のいよ  
ゆうれて為跡續め。ほづく也。  
一今度鎌倉後恩食立タ事ハ當御所の法政道  
館より無く。かこアガハ後下よ有立け。出来て  
天下がうとも御當家承うひん事とあもよ思ひ  
乃まめに御じわんとあぬひん事とあもよ思ひ  
當御所も悪く御意とひづく。一向言政  
斗と思ひ。ひるの事もとつて御恩行所參  
道とゆく止りひく人の歌もやうほんよ行ふ

うへ今鎌倉後も思ひ立へき是種人氣もうちみ  
アキミテアシカたま御運もほく御威勢ひりかへく  
わくをゆ小向ては通ひかくわくをゆ  
や誰のくは鎌倉後もかくをア望みア望み  
その内侍要よりまくをゆくは御行儀を着け  
く関東御調伏かとくは國事も多うく成程の  
御てうやの拂衣をうち控えをひて天子め  
下ある道とすく爲よも見こめされん小強の  
大道も佛神の内ゆる立所よけせりとくと思  
ありのむはなうとし合戦かくふたまつや天

地人お三にうそと曰ふた天乃利と云ひ其の本原  
日喰本吉万喜人のまれ候あくに馬へあくすう  
ぬ(き)と見て天乃利と云ひやうめ地乃利と云ひ  
或ひよき要害山或大河難高あくと前よ當  
より也城主とあると地乃利と云ひ人の利と云  
理う終へんおう一同まとくとせり人の利と云  
地乃利ハ無用うそとやうて目を申  
のべねの間へてゐる御恩は前事と作もひる  
御恩を不可お朱然ハほれ禱もまくして残るよ  
重きとおは意も差御恩事非義わざを

御行移小てほくのをせせんと思ひんよ秘書  
ゆうじたわゆゑ

一 大角和泉よりのわきまへぬ秋山野のまうぐく  
も不る所にて從園東一もり一紙の書付たるす  
あくやき唯大角や行ゆきも諸方のく並の御書を  
とてお車へ六扇門ふよびもよなへまふ別れな  
るもへ遠近園すくすの裏へ本園東の事すら左  
よもと承ゆくへりやうるも疑思石と角く承り  
乃へ九尺よ仰へて以西船舟をまよへとて是  
事也ああうれうやは方ほうとふの思は

よ合て鎮西北草すを御筆葉は左室かどやつて  
御半身へ御おもひ下みかのあへて是すれて所  
子俊と云差やて歿忠節。手は左と右書三回通年給  
よ御と意不審にあく園からく我身ハ隱居へく  
よちう事ハ仕合を追て可相斗若於京都内御助  
あくじを為天トして錦倉度思石幸事御當麻内御助  
久とくわくの處安堵めと思ふあくじを左へ大御  
所錦小治後大休寺後は左中邊乃所も一天下の人  
が集ひてよき當麻内左中邊がめうれんますそ  
あなうらみほり事のうとほづれとおすアトモ

兩門所小思ひよおすきと諸人の處ハ  
大体寺法ハ政道移わざりてゆる事  
御より是乃將軍もてより私曲とてせりの  
是より、桂川中御所と宮内院所と  
大御所すに由父子御事と桂川中御所  
大体寺法も又あま一御事かくもあられり御思  
ともよく中と代の所相恨ゆるもて天下とも御  
當と御成ゆつゝ事と大体寺法と大御所へあや  
や一御事と代の所相恨ゆるもて天下とも御  
院所へうりと天下とをはりよすとせらす

よの御方便ゆてに排列井上は合戦乃のり師直  
師義とれども大御所のうちめりをはり  
きく山合戦後上ね民部太輔自便意めり  
方て落行つゝの大御所とあやせりて又御  
合戦ゆきゆきや東の坊つ處のあやせり御め  
りゆきゆきをゆき一御事とあやせり  
も關東大々不一同セハ自ら坐め守護ゆりて然ハ  
坐と各所見事大御所中よもよも坐と重すされ

て京都に御守自よりアマレ可モ自也と  
御内侍より移東八國城ハ先王御料基氏アリ  
謙アリテ御ゆく源ニ坊ノ海也御代ノアリ  
トシテクドケウセキヒテ也後兩御御隠れ也  
ノ後京都と恨アリ草内と連々圓東と勤アリ  
あるもアリモ後大御御乃御素意ともとセキナリ  
ひと自家京都ハ大体素波の御アリテ御内侍  
御御恩アリモヤメアリテハ身也天下のすき頃  
思ひく諸君に御立ちひもモ大錦合慶基氏

宝蔵院及よしと三ヤアミセアリルアソシ業及ノア  
モ實記況アリのア御アリナは度アリ事ナハ  
其時大御所恩を置テ御事アモハ只處當處  
ハ御中に天下と云々をひて政臣也たゞ一  
ヒエと可修計とは遠近よりて後秋ホ思ひ  
ノ成系都アリ遠ニシテシテシテノ必至アリサニ  
頃國東も御和賀の上松島アリトキテノ  
系都アリ遠ニシテ思ひセテ御小我方ハ義定に  
隠居スモ左乃アリハ京師念の事有カ左御ノ  
隠居スモ左乃アリハ京師念の事有カ左御ノ

いは秋ふる風はくに猶錄寫及と勧す  
と色系部とも思ふ一物と存するも遠見の  
乃事の耽是雅園東施御アリシテ御相賀  
のよは系部と云園東ミシ人との方至美御  
也あまきアリムトモカモトとは隱れ  
いつものおもてすかトモエキトは  
重々とねりりも帰せしと園東よ  
うちめ御ヤ者秋ふる事アリ為系部御半  
多可もるゆハ園東トモアリモ可は退居  
ルル系部に御ヤトキス

不便のよとなせ小糸の佐人忠功令系  
後高仰助立トと有るよ志のよニ義  
作一左系公セセトやうに事とあすふるゆひ  
日首カリケヌ義理ア嘉勤アシガバシハムトテ  
名利よりもあくじきトキスヨリ歌よ猶錄え  
王之く秋ふ九列小糸向せ一事とアシバナヒアヒト  
宣一情セヨリ名を立たぬ事アリ也當御御の事  
トヨウ御情も立ムモノハ社ハシタモア成  
との秋く御當御御為よハ豫支私どもくア禁  
事と思ひ一あよ西園改可治のよ圓え一は

只任志行て巻向して魏頽家ノ群百人をせて  
済々身死而目不瞑すと云ふ事ハ之御ボハたゞ  
高ニ歎事也人主オ乃位ト志たひて忠と云すキヨリ  
あきらめ未だも忠功トするが爲めに恨のそ  
生來うどおらざる也

一 大内義弘ノ道生之年大友尾園氏ヒシタマテ莫て云  
大友之事始中後以御持一跡トあるアホー教カホアホ  
郭恩トの事ト車ト難ヒツ義弘ヒシタマノ一母ト度トば者ト有  
上意難儀系ヒツの西一度ト坐ス方トされトアホ  
て今下向トの事ト乞スレ恨尾ヒツ龍リョウ不ス仁ス也ト御ス悉トそ

度トハ車トひと之ト御芳君ヒラタケン成重ヒサシタマれて由射面ヒヤシタマト下  
すり下トまト兵庫ヒガ乃津ヒツ洋ヒヨウ日ヒ佐ヒサ而ト御祖  
賛トムハ向後ト亦可ス後患ヒツク而ト立ちス後トもトも  
えトれト事ト御スて不ス候スとトなトのれト今度ト三方  
度トヒトよよりト御ス事トハ只ス古法ヒコハ駕頭ヒヤトウトトり  
あトトトハ子ト優ヒツ系ヒツ濟ヒツ時ヒツ方トそト御ス事トアキスく  
脚ト尋ト多く何ト事ト大ト宣ヒツれス事トハ欲ヒツ仁ヒツ事ト  
御ス事ト作ヒツ御ス事ト小ト難ヒツ心ヒツ之ト曲ヒツよ

仍大友系治すも後はる候よりよしはれどもそ  
まく一ももれ事思ひ達上國たりまみ  
一但已悔とへ取て下冠面之由トモは我おもひて  
へと後と我ト向の事多々アト向とし御詫脱  
迎日也我また大友事象と義教作事小至りれど  
弟アリて尉面の事アリはよ意とされシテ不禮  
は事御方はアリ男尉面可はばいあや向くてね  
意アリアリ太内アリアリめアリや大友ノ級ある  
アリ起請事と兩度依仰以自筆書を記只  
子後う為起因く御免す然と云ふては急

不復上意に背へきありヒヤーひらく居あ  
大内らしくて御所の内法乃様見及アリムハモ  
キシルハ罪づきれども御が審とくからず矣而  
因行の如きのハ陰宵と云フおれアリキ事ニ  
人の知れども方の御恩と云はシカヒト易おレ  
メシモの内自力弱事あらハ則内面自あき事モア  
出来アリハ國石頃とくアリ内松小可子官石誇  
貴方も李もと云ム國アリムアリムと云  
よし頃あくの事アリムはあくの事アリ

侍ぐ如鶴及ハ諸大臣仰一族もば事あるにら  
うく、少冷也貴方御仕はく九列中國ひよす  
、余者則少くの承代がうああ私也らずに大  
お事ハお九列以大名也御重恩が下るて我へ一  
味う御易可はれ然る所今義公起請事以系  
くも進く別くあるも御一味うへばたれ  
大友ナキニシテ日向と不候主く之え東御辻  
お西事仲高道源者御事也乃御通私の是  
ほ入る人越事不裏てめばア室まくもう北事也  
又高止憲御宮の之御不審我

ナキ事何人ふれ一昧をいふくニ重縁有そ  
うと被十年於恩所ハありて之を怨る御宮もす  
ヘドモアニ一昧とう一あひするあまく  
只相撲て、御三方代役未まく、あくまでも不處  
をめりて、とある也御中奉事、未まく度なが御  
作事等あひて、和賀、和睦、未だ、未だ、未だ  
御扶持ハ向後主事とよびて、とて為天下私曲  
かねての御行、とくに、御事、御事、御事、御事  
事、と、内外とも、太内、内方、御事、御事、御事  
うちよしのやうは三方の臣子、とて、おもひ

あはーうう 築西の輩、我が御車私曲をもじる  
様にてうらやまゆる余、汝にて御御聲のよすは申く  
九筋乃事アアムジト有セテと汝が御御聲にて  
て承く九列の人々、我が私曲と名ひきものれ  
あるや個室よりよさまるれ、かゝるや御御  
歌乃うちひめど、誰のあらしもあたるべ一也  
と太角和泉よ池よりて御歌の内へ定められ共不ア  
矣、よほすには太角とあくは方より合へきる  
御入をもととて修き、お部の義及びて能く  
御歌にあがくつゝよ成者心すく身とう

あはうう御車をうひて不道不善無礼とゆきまひく  
可然、親不孝なればよ不義はすまは不思不  
奉ま乃故人を通尾の龍の輩町人土民あらの時すもの  
へほ人乃彌と尚じせばいとも同車也是うち御  
孫子相持て、よくほもあとて書き重ね不後立せ  
よは文他思あらぬ、まことに親のあうて  
よよの孫よとのれきうとよすも親のあうて  
終やあらん

應永九年夏月

卷之二

午時七八年  
徳翁

一  
鎌倉の陽泉寺坂基氏代御名舞木紙ふう祖父の  
名也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
家とれてもあらま事乃る事とやアモリ  
そくをんとなれや新田方のへくひ名舞木も  
四方のとくを祖をばる家とててもアマ  
ノ道、もくや、義教、花地、あく、ひのきの  
アラ、とも、年九月、うて、我とある  
と名のアラヤ、不孝の事也さ、今、年中とくと  
跡、よ中風氣をり、おもふ時思ひのうに  
草もあらましもむじも人、はなび、比、風也、みやめ

假  
字  
か  
な  
と  
老  
い  
れ  
の  
不  
ひ  
き  
も  
と

一章のアリある。又後九列とも車之入る  
たる事は、河口より人内ア通探頭れたり  
又、(櫛川)を一為探題ため、小勦解由ハ涉方便  
大敵難矣、又復骨休ホ、靜瀧乃時てありて  
考切跡者ヨリ、又あ。利口也。トシケモ。伍中四  
事と思ふ。櫛川事ハ、前事也。

本雅太史記以瀕名貞如本比後了